

エディトリアル

練馬光が丘病院放射線科 部長 伊藤大輔

放射線科医になって20年の歳月が過ぎたが、自分自身で患者さんの単純X線撮影を行った経験は未だない。ところが「月刊地域医学」の読者の先生方にとっては、診療所で自分で単純X線撮影を行うことはありふれた経験のようで、これはとても興味深いことだなと感じている。

単純X線撮影を正しく行うためには、X線の入射方向に合わせた正しい患者の撮影位置の設定が必要である。当然解剖学的知識も必須になる。だが本邦の医学教育において、そのような教育をする機会はなかなかないのが現状である。

筆者の所属する練馬光が丘病院に、再研修の先生が読影の研修に来たことがあった。その先生は“診療所で自分が単純X線撮影を行うので、その方法を勉強したい”と言って、自ら放射線技師に教を請うて単純X線撮影の研修を行っていた。この経験はご自分が診療所に出た際にとても役に立っているそうである。この研修内容を読者の先生方にも共有してもらうことは有用ではないかと考えて今回の特集企画を提案させていただいた。原稿作成については練馬光が丘病院の放射線技師たちが快く引き受けてくれた。自らが撮影モデルとなって、正しい体位の撮影を引き受けてくれた。ここに謝意を表す。

今回の特集の目的は、診療所で医師が自分で単純X線撮影を行わないといけない際に、確認することのできる実践的なマニュアルを提供することである。ぜひご自分がそのような機会があるときに、この号をお持ちいただき、役に立てていただきたい。また、撮影方法を確認することで単純X線撮影およびX線解剖に対する知識の整理にも役立つであろうと感じている。

(掲載から1年が経過した記事はPDFでダウンロードすることもできるので、その際はお持ちのPCやスマートフォンなどに保存いただくことも可能である。)